

脳のセットアップの三段階

ワークショップのような、きちんとプログラムされた話し合いでは、参加者が互いの意見に触発され創造的な議論が展開されることが多くみられる。企画・運営に携わる立場から、どのような点に留意して話し合いを進めるべきかは常に考えることである。ただ、それを参加者の体験としてどのような意味を持つのか考えたことがなかった。そこで、いろいろな話し合いの現場を観察しながら、参加者にどのような変化が生まれ、創造的な議論に展開していつているのかを考えてみることにした。

参加者は話し合いのテーマについてはある程度理解して参加しているのだが、関心の度合いや知識はまちまちなことが多い。そのため私たちは、まず話し合いのテーマや目的などについてわかりやすく説明するようにしている。それから知識や経験の有無に左右されず、誰もが意見を言える「議論の入口」をつくることにも留意している。それらを踏まえて参加者がまず「自分で考える」時間を大切にし、つぎに「他の人の意見に耳を傾ける」というプロセスに丁寧につなげていく。そうすることで参加者にはテーマに向きあう「意識脳」が整えられてくる。そうすると多様な意見を受け止め、自分の考えを相対化することができるようになる。

次に私たちは、出された多くの意見から似たような意見を整理し「議論の見取り図」をつくり参加者と共有する。そして、そのなかから何が「論点」として重要かを互いに確認し合い、なぜ論点として重要だと思ったのか理由を話し合うようにする。そうすることで参加者の「論点脳」が活性化され論点に集中する思考力が生まれてくる。そうなると「議論の出口」に向けた何かがみえはじめ、提案的な意見がそれぞれの参加者の頭に浮かび始める。この段階になると「議論の見取り図」を囲むように立ち上がり話し合いにも熱が入ってくる。

ここまでくれば「議論の出口」に向けた様々なアイデアが出るようになる。いわば「アイデア脳」が全開する段階になる。アイデアは客観的に見ると最初は玉石混交状態であるが、「論点脳」に基づき「共感度」が高いものが浮かびあがってくる。このような「脳のセットアップの三段階」が参加者に生まれることで創造的な議論が展開されているように思うのだ。